

日本の文学

64

井上友一郎
田宮虎彦
木山捷平

中央公論社

井上友一郎
田宮虎彦
木山捷平

昭和45年2月5日初版発行
昭和47年9月1日3版発行

発行者 山越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 株式会社トープロ
色刷口絵印刷 株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷 株式会社トープロ
本文用紙 本州製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製本 協和製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

井上友一郎

菜の花

受胎

ハイネの月

日本ロォレライ

雨垂れ

夕顔

お雪さん

ある商人の告白

24

45

83

100

112

145

157

猫よ悲しむな

田宮虎彦

異母兄弟

足摺岬

絵本

菊坂

少女の声

銀心中

異端の子

牡丹

171

183

207

228

247

269

284

304

317

木山捷平

大陸の細道

初恋

注解

解説

年譜

口絵
挿画

河盛好蔵

「牡丹」

橋本興家

「葉の花」「受胎」「ハイネの月」

「日本ロオレイ」「夕顔」田代光

「異母兄弟」「足摺岬」「菊坂」

「銀心中」「牡丹」

橋本興家

「大陸の細道」

吉田清志

526

512

504

490

355

井上友一郎

菜の花

瓜生うりせいのことを書いてみよう。どこまで書けるかわからないが。……

瓜生が小菅こすげの刑務所につながれていたことを偶然私は近ごろになって知った。近ごろ知ったということは、つまり瓜生がそこからようやく出てきたことを意味している。瓜生が出てきた事実によって逆に私は瓜生がそこに入っていたのを知ったわけだ。

出てきた瓜生に私はまだ逢あっていない。是非逢わねばとも思っていない。それはどっちでもかまわぬが、しかしともかく瓜生がそんなところに入っていたのだという事実はかなり私をびっくりさせた。この気持はやや入り組んでいる。途中で一たん杜絶とだえていた物語に、あたかも一種のむすびが出来たような気持である。それは瓜生もまさか窃盗や人殺しをしてそんなところに入ったわけでもあるまいから瓜生の知人や縁者たちにもいろいろ複

雑な感慨はあるだろう。ごく普通の意味においては私もそれがある。けれども、そういう素直な感じとはまたちがった別な感じ、それが意外に激しくこみあがるのを到底私は禁ずることが出来ない。

何しろ大分古いことに溯さかのぼってみねばならない。今からちょうど二十一年前である。なぜ二十一年などと、いやにこまかいことをいうかと言えはその年も押しつまつた暮近く大正天皇の崩御があつて、当時私の下宿していた京都の有名なM——寺の境内に、近所の子供が毎日のようにあそびに来ていて、さも物悲しい、いわゆる諒闇りやうあんの歌をうたっていたのが記憶に残っているからだ。文句はほとんど忘れたけれど、何でも「地にひれふしてあめつもの」とか「あやめもわかぬ路みちゆく」といったような大変寂しい、それは自然に気持の暗くなるような歌であつた。私はあんなに悲しい歌は耶蘇教イエスキョウの讃美歌さんびかのほか全く知らない。もつとも讃美歌が本当に悲しいものかどうかともよくは知らぬが、かつて私は中学時代に死んだ級友の葬式に参列したことがある。それが耶蘇教の教会であり、その席上で合唱された讃美歌が世にも悲しい節回しで、別にその友達の死んだことを何とも思っていないかゝつた私を耐え性もなく悲しくさせたことから、その後私は讃美歌などというと言ふと直ちにこの諒闇の歌を思い出して、そうしてその物悲しいやるせない歌と一しよにいつも瓜

生のことをまざまざと思いうかべる、こういうわけだ。

その日、私は用があつて下鴨の糺ノ森の瓜生の家を無理やりに訪ねて行つた。(無理やりに、という意味は後に述べるところでわかる) 瓜生はちよつと変つた男だったが、瓜生の家もまた何ともいえぬ変な家で、普通の意味ではおそらく人間など住まへぬ感じで、電燈もなければ、ちゃんとした便所もなく、もちろん炊事場などの設備もなく、多分古池を前栽に取り入れた広大な邸宅の離れというか亭というか、まあ、そういう性質の建物だつたような気がする。それも肝腎の本邸が取り払われたあとの森のなかに、荒れるにまかせて放置されていたらしく、誰がみてもそんなところに人間などの住みそうな気配はみじんもない。けれども瓜生はそこにいたのだ。

当時は京都の至るところに空間札のぶらさがつていた時間で、食事付きの低廉な下宿屋だつて探すのに何ほどの苦勞もなかった。私などもひとところ、烏丸の上立売をちよつとあがつた電車通りのあるうどん屋の二階を借りていたが、何でも商売不振が原因で、このうどん屋が突然店を畳んで四国の松山とかへ引き揚げることになった。

自然私も二階を出ねばならなくなった。その申し出を受けるや否や、私はうどん屋がそう急がなくてもよいというのも聞かず、早速近所から荷車を借りて来て、それに

蒲団や机を積んで、烏丸の大通りをごろごろとひっぱりながら、それでもその日の晩方までには新しい下宿を探し出したような経験がある。だから瓜生が糺ノ森のその変てこなあばらやに入つたことも、よくいえばものずきで、特に瓜生という人間をあたまたにおいて考えると、瓜生の奴、何だか変にかぶれているな、そう私たちの仲間ではよく批評したものである。

瓜生がしかし、ほんとうに何かにかぶれていたかどうか、事実またかぶれていたとすれば一体何にかぶれていたのか。それを説明するためには逆に瓜生以外の私たちがそのころ何にかぶれていたかを話したほうが早道である。つまり私たちがかぶれていたのだ。そのころの学生には大概一度は襲いかかつてきたあるどうしようもない考え方にかぶれていたのだ。そうして、つまり瓜生だけがそのような私たちからことさら超然としている態度を目して、仲間の者が瓜生は変な孤高癖、超然癖、芸術癖みたいなものに何だか変にかぶれている、と言つたものだ。それがはたして何ほど當つていたかは知らない。けれどもそういう瓜生には確かに私たちとは少しちがつたものがあつた。第一、瓜生には一しよに暮らしていた女がいた。これが日常の些末なことにもいろいろあらわれていたことは確かである。たとえば物の考え方に、どこか私たちより大人びていたのはそのせいである。第二に、

瓜生は当時の私たちには常識を絶したほどの老大な書籍を持つていたことである。第三には、瓜生は他人を訪ねることはあつても、どういふものか自分の家には人の来るのを極端に好まなかつたことだ。糺ノ森のあばらやに入つたこともやはりそれに關係がある。第四には、——そうしてこれが瓜生のことについては最も大切な点であろうと私は考えるのだが——瓜生はおよそ家系とか血統とかいふものには、金輪際何の意味をも認めぬ男で、よくわれわれが雑談していて、話が、家柄とか先祖の血とかにふれてくると、瓜生はパツと弾ね起きて、——じつさい弾ね起きたという感じで、対者の意見をまっこうから容赦なく否定する。

「そんな莫迦げたことがあるものか。何の、血筋だとか、家柄だとか、そんなものは全く無意味だ。鴉の子は鴉だ、ということとは確かだが、レーニンの子はレーニンであり得るか。トルストイの子が親父の半分もトルストイであり得るか。おれはもちろん、色の白いおふくろが色の白い子を生むことは認める。鼻の高いのや、骨格の逞しいのが、やはりそういつた子を生むことは認める。しかし、およそ人間の精神とか魂とかいふものが、そんな具合にやすやすとまるで卵でも生み落すみたいにして受け継がれるものとは絶対に思わない。人間、オギャアと生まれた瞬間に、そういう風に高貴な精神、卑俗な精神という

風にちゃんと決められていてたまるものか。そんな人生は考えただけでも悲し過ぎるじゃないか。結局、おれは精神などというものは激しい苦痛や抵抗なしに出来あがるとは絶対に思わないんだ……」

瓜生の意見はとにかくにも、それを述べ立てる瓜生の一種のはげしさには誰もちよつとかなわぬ気がした。あるときなどは、瓜生とそんな議論をしていて、瓜生が何だか怖くなつたという男もいた。私はそれが瓜生の生い立ちに關係しているものとみていた。瓜生は九州の福岡の出で、親は何でも炭坑にはたらいっている人間だと聞いていたが、そういう身分を本人は特別に隠しもせねば、特別にまたてらつたりもしなかつた。ただある機会に、多分それは一しよに酒でも飲んでいたときだろう、そうして多分そのせいだろう、瓜生は珍しくしんみりとこんなことを私に告白したことがある。

「どういふものかね。おれは立派なものとか正しいものとか、また堂々としたようなもの、そういつたものをみると、何糞と思うくせがあるんだ……」

「なぜ？」瓜生のいうことがよくはつかめず、その説明を求めるような眼を私はした。

「たとえばの話だが、まあ、おれたちの学校で校長が更迭して、新しい校長が赴任してくる。そうして、その校長が大そう立派で、そのため皆にひどく評判がいいとす

るね。するとおれはまず何糞と思うんだ。反撥だね。それがまた、耐え性もなくむらむらと湧き起ってくる」

「それは無茶だな」

「無茶かも知れない。しかし、どうにもしようがないのだ。たとえば京極で活動や芝居なんかを看ているだろう。そういうものを看ていたって、おれは主役で、一番シャンで、一番人気のある女優には、何を、という気がまず起るのだ。そうして自然に二流どころか、三流どころの女優のなかで、なるべく自分の好みに合いそうなのを探し出すんだ」

「派手ぎらいという意味もあるのだな」こう私が呟くと、瓜生はちよつと蔑すむようにこちらの顔をみつめていたが、

「そうじゃないさ。そういう同情的な相槌を打つのは止せよ。だって、君には、もうちゃんとおれの腹の中が分つておつて、そんな変な、取りなすみたいな調子を打つだって、そうだろう。君にはそれがなぜだかちゃんと分つているんだ」

「分っているようで、分っていない」

「分っているよ。だってそうに決まっているじゃないか……それは、おれの卑屈な心から来ているんだぜ。おれは卑屈だ。どういふものか卑屈なのだ。おれはいつも人に向うと、まずこの人間に負けちゃいかん、と自然にそ

んな気持になる。まずこの人間と対等にならねばいかんと思う。つまり、おれは知らず識らずに、いつでも自分の劣等感と闘っている……しかし、おれはこの卑屈な劣等感を、たとえ十年計画でも直してみようと思っているのだ」

こういった話に対して誰しも返答に窮するのは自然である。私もやはり言葉に窮してぼんやりうなずいていたのだけれど、ふいにそのとき——いや、そのときではなく、大分後日になってからだ、——ああそうだ、それで瓜生の奴は、とおのずと思いあたることがあった。それはやはり別な機会に瓜生自身から聞いた話で、何でも炭坑などを経営していわゆる巨万の財を積んだような成りあがり的大金持ちは、どういふものか四苦八苦して東京や京都辺の没落華族の出戻り娘などを自分の妻に迎えたがる、というような話である。ちょうどそのころ世間では例の銅御殿の伊藤伝右衛門という金持ちが筑紫の女王などと騒がれていた柳原白蓮に逃げられて、それがわざわざ卑俗な歌になって流行していた。で、私の連想も雑作なくそんな事情にむすび付いて、なるほど、それで多分瓜生の奴も——とすぐそこへ考えが傾いたのは自然であった。つまり、瓜生が当時一しょになったお民という女が華族ではないまでも京都では相当な名家の出で、茶で有名な千家の流れにも関係があるらしく、とうのむ

かしに分産して死んだ彼女の父が、かつては有名な市会議員の切れものであったともいう。瓜生が彼女とどこでどうして知り合ったのか、そのころの私には一切わからぬままにつきあつていた。けれども、時どき見かけるそのお民を私は単純な童貞の眼で、ああ美しい人だな、と思う以上に何だか瓜生の粗暴な力におしこめられて無理やりにそんな妖怪でも棲みそうな糺ノ森のあばらやに日を送っている、というように考えたものである。この感じにはもちろん大した根拠はない。ただその人のおっとりしたことなく寂しそうな人柄や、瓜生自身のあのキラツとする一種性格の上の怖さ、激しさ、といったものから漠然生じた考えにちがいないが、何といてもそれは彼らの暮らしている荒れ果てた森のなかの電燈もない変な建物からくるある感じ、それが強く作用していたとも考えられる。

で、私が、その日——大分余談が長くなったが——上立売から相国寺の境内を通り抜けて出町へ出て糺ノ森に訪ねて行った瓜生の家とは、大体そういう一風変わった陰気くさい家であった。寒い午後もう夕暮の近い時分では私は釣鐘マントに身を縮めて歩きながら、自分がこれから瓜生を訪ねる、そのことのある重苦しさを考えて何だか気持が弾まなかつたのをよく憶えている。その重苦しさは二重であった。なぜかといって瓜生は第一、人が訪

ねてくることを好まない。そのうえ私が押して瓜生を訪ねるという用件が、かねて瓜生が極端にきらっていたあの仲間のある仕事に無理やり誘い込もうというからである。今だから簡単に言ってしまった。そのある仲間とは当時世間でもひどく憚り、父兄はもちろん学校からも極端に嫌われるという性質のものであったが、瓜生はしかしそういう外聞を憚ったりしたのではない。それはやはり瓜生自身のしっかりした考えのうえの結果で、例の瓜生の超然癖や孤独癖にも関係があると考えられた。そんな瓜生がしかし妙に私たちを刺戟し、瓜生を口説いて仲間に入れようとすることが私たちの当面の重大事であり、また友情のある強いあらわれだという風に信じられていたのである。もちろんそんな誘いかけは瓜生に対してこれまで再三試みられた。そうしてそのたびに少からず手強い反撥を食わされていたのだけれど、それだけにまた瓜生を見事に口説き落そうと努めることは私たちの変な功名心を唆りもしたし、あくまでそれに拘泥するということにも一種の良心のようなものを感じていたのだ。私は瓜生がこの仲間に加わらぬのがいかにも瓜生らしいと思う反面、また何となく瓜生らしくもないと思った。この考えには常に瓜生がただの坑夫の子供じゃないか、——これが強く頭の隅で動いていた。が、同時に瓜生のそういう生活態度も、結局はあんな女と一しよに暮らし

ているからだろう、といった風なただ漠然とした嫉妬——嫉妬といえはやや強いが少くも羨望の情がうごめいていたことは否定しがたい。

「そうだ。憎いのは瓜生じゃなくて、あの女だ。おれたちはまずあの女から瓜生を離さなくては……」糺ノ森に入る前に、そう私は考えて気負っていたが、しかし、やがて森のなかに入って腐った落葉を踏みしめて瓜生の家の窓口でお民をみると、この考えがサラリと消えた。

瓜生は不在で、お民がただ一人留守していたが、私は池の手前に立ち止まってその池が瓢箪の口のようにずっと一方へすぼまった狭い二メートルばかりの水面を隔てたままお民と喋った。

私は何となくお民を特別気の毒なように思った。お民は着い疲れたような顔をしていた。古風な円窓に花車な半身を寄せかけてお民は低い声で話していたが、私は目の前の濁った水の上にぼんやり映る彼女の黄色い着物の影をみつめながら一語一語を噛みしめるようにして聴いていた。お民はそのとき瓜生が近ごろ外泊をたびたびするし、またどういった事情かはわからぬが粗末な女物のメリンスの着物などを大事そうに預かって帰ってきて、彼女がそれを訊ねるとただ恐ろしい眼をして黙りこむ。それはよいが、何分電燈のない家なのでいつも町で蠟燭を買ってきて点している。その蠟燭も、瓜生がひどく金

銭に喧しく一々物を求めるたびに一円、五円という風に手渡すので、瓜生が長く家を明けて、ふいに蠟燭など切らした際には一晩じゅう真暗な部屋で待っているより仕方がない。食事もずっと出町の仕出し屋から運んでくることになってはいるが、どうしたわけか近ごろ現金引換えにしてほしいということになったので、瓜生がどこかへぶいと出かけてゆくたびにそれは実に冷や冷やしてよいけない氣づかいをすることが大変である。一体瓜生は親切でいい人間だとは信じているが、どうもこういう仙人みたいな不便な家に住まっているの、その人並みはずれた不便さから、ついあの人を無情な人だと早合点しそうになって困っている、と、およそこんなことを私に語った。それが感情を露わに出さぬ話し方で、その感情をおさえておもてに出さぬという点でかえってこちらの受ける気持がへんに強かったのを私は記憶している。

「そうですね。だが瓜生は僕たちの下宿なんかによく泊り込んでゆくことがあるんですよ」と、私は言った。それは事実だ。そうしてそれは言葉のうえで瓜生のことを弁解している形になったが、実は、私はもうこれ以上この寂しそうなお民をつらくさせたくはないと一途に思っていたからだ。

「ええ。それはわかっていのだすけど」と、彼女はちよっと首をかしげて微笑しながら京都訛りで答えるのだ

った。「……どこにお泊りやしてもかまへんのどすが、
それでも、この森のなかで蠟燭なしで夜を明かすのは物
凄いだすえ」

「そりゃそうでしょう。それにあなたは、瓜生が右向い
て坐つてろ、と言いつけると、一年でも右向いて待つて
いらつしやるようなところがあるから……何しろ大變従
順だという評判だから」

「あら。そんなことおへんわ。反対どすわ。瓜生はあれ
で、わたくしが古い窮屈な人間で、何やら變に束縛した
り、圧迫したりするようで、瓜生のしたいことをいつ
もうしろからせきとめる、こういつて怒るのどすけど
……」

「どうしてでしょう？」

「さあ。ほんとうにどうしてでしょう。わたくし、何一
つ言わへんのどすけど、いつもお前の考え方がこのおれ
を目にみえんとところで縛ろうとする、と言うのどすわ」
「そりゃ無茶ですよ。でなければ考え過しですよ。それ
とも、瓜生はあなたの家柄とかそんなものに、ひとりで
にシャチホコ張つて、反撥をかんじているんじゃないま
せんかね」

「いいえ。そんなことおへんわ」

そう言つてお民はやさしくかぶりを振つたが、それは
瓜生のそんな態度を否定したというよりもむしろ自分の

家柄がそういうものに値しないという心だと私は解した。
私はしかしこんな風にいつまでもお民と話していたいと
思った。それは話の内容には関係なくただお民と喋つて
いただけで、いつかお民が、わたくしは西洋人が英語
を話しているのを聴いていると何となく氣持がよいとい
つたように、他国からこの土地に入り込んだ私などには
別に深い仔細もなくお民の甘い靠れかかつてくるような
京都弁はただそれを耳にしているだけでもたのしい氣が
した。

だが、私は帰らねばならなかった。短い冬の日がこの
森のなかでは、格別早く暮れかかるのはよいとしても、
その日私はどうあろうともとにかく瓜生をある仲間の会
合に引っぱり出してみせると広言してきた手前もあつて、
なお二、三の心あたりを探してみる必要に迫られていた。
で、「おあがりやしてしばらく待つておいでたら」と言
つて勧めるお民に向つて私ははいねいに帽を取つて別れ
を告げた。私は二、三歩行つてからちよつといたずらな
氣持になつて、「今夜、蠟燭ありますか」とお民に言う
と、「蠟燭あります」と言つてお民は笑つた。池を回つ
て森の外に出て行つて、そうして再び出町から相国寺の
ほうへ急ぎ足に歩きながら私は何だか大變沈んだ氣持で、
先刻この道を瓜生の家へ向つている際に考えていた考え
と同じだけれども、しかしそっくり別な心でそれを考え

ているのだった。「そうだ。やっぱり、おれは瓜生の手からあの女を引き離さなくては……」

歩いていると正面の愛宕の山ではキラリと一点、夜のあたりが点っているのが目についたが、そのくせ広い烏丸の電車通りへ出て行くと思いのほか白々と真昼のようになまだ明るかったのを私は忘れない。私は沈んだ気持のなかで妙に昂奮しているようだった。私は何だか、現在こうして歩いている、それが自然と私自身や瓜生やお民などの運命の重大転換に近づいているかのように考えられて、そんな空想に思い悩んでいるのだった。私は間もなく烏丸の大通りからごとりとごとりと薄暗い京格子の奥のほうで機を織る音のにぶく聴える狭苦しい露路を幾つか曲り、やがて崩れかかったなまこ堀や建仁寺垣の傍を通って上立売の小川頭の一角にあるMという大きな寺の公園みたいな境内まで出た。私はちよつと自分の下宿を覗いてみようと考えたのだ。偶然瓜生が来ていやしないかと考えたのだ。何しろ世間の狭い学生同士の限られた生活だから当時われわれのこうした勘はふしぎと的中することが多かった。私はそのとき今にも瓜生が私の下宿を覗いたうえまた仕方なくふらふらとこの境内に出て来るような気持がしていた。しかし、それとも他の場所を探してみるかなど私はしばらく思い惑って、その大きな山門の辺に立ち止まって煙草を喫った。山門の近くでは

まだ遊びほうけて家に戻ろうとせぬ子供たちが例の悲しい諷刺の歌をうたっていた。私は心から寂しくなった。私は、自分がしたいと思うことをほしきままにやってみたいという風な考えに囚われていた。日ごろ、努力でこつとさら庄えつけていたあるものを思う存分解き放したいという感じで、いかにもそれが若者らしい、恋を恋するセンチメンタルな気持に過ぎぬとしてもそんな気持に一度は手放して身をまかせたいという衝動に駆られていたのだ。が、そのときはたして瓜生のがつしりした大きな体が境内の奥にみえた。やはり私と同じように長い釣鐘マントの裾を垂らしてズボンの下に朴歯の下駄を引きずりながら近づいてくる。瓜生はそうして私の姿を認める

「何だい。今、君の部屋を覗いてきた」と言った。

二人はそのままスーッと肩をならべて何ということなく山門の外に歩いて行った。

「おれもしかし、今、君のうちへ行ってきたんだぜ」

「そうか。何か用だったか」特別の用がなければ、この男は漫然と友達のあそびに来ることを認めない。

「話があるんだ。今夜までに、どうしても君をつかまえる必要があったから」

「そうか。聞こう。……ヴィナスにでも行って見るか。しかし、君、金はあるか」